地域資源としての石造物

関連するSDGsの国際目標

人間文化学部　地域文化学科　　教授　　佐藤　亜聖
研究分野　：考古学　文化財科学　歴史学

概要：石造物は重要な歴史資料であり、かつ誰でも触れることのできる身近な文化財である。その歴史遺産としての重要性を再発見することで、地域資源としての価値づけを模索する。

■石造物とは

石造物とは文字通り石でできた造形物のことである。広い意味では旧石器時代の石器類や縄文時代の岩偶なども石造物となるが、一般的には飛鳥時代以降の石製造形物を石造物と呼んで、研究対象としている。この石造物は日本中あらゆるところに存在している。辻の祠にあるお地蔵さん、墓地に転がる古い墓石、お寺の石塔、神社の狛犬、あらゆるものが歴史研究の対象となり得る文化財であり、歴史遺産である。

■石造物研究と地域史

石造物は身近にあり、またどこにでもあることから、その価値が顧みられることが少なく、ひどい場合には墓地整理とともに廃棄されたりしてしまう。しかしその地域資源としての価値は大きい。

写真は長浜市西浅井黒山石仏群である。ここには鎌倉時代の見事な石造物のほかに、大量の小型石仏がある。いずれも室町時代から戦国時代のものであるが、これらの中には近江で見かけない暗赤褐色の安山岩が見られる。これらの石材は遠く敦賀の海岸で産出し、陸路運ばれてきた石材であり、モータリゼーションによって失われた日本海から京都に抜ける湖上交通のありし日の姿を語っている。

■石造物研究の可能性

筆者はこうした石造物を詳細に研究することで地域の歴史を復原することを目指している。同時に、歴史を街づくりに生かす際に、石造物も重要な構成資産となりうると考え、その活用を模索している。古文書や考古資料は雄弁だが、資料館などに行かないとみることができない。石造物は街並みの中に溶け込んで、「いつもそこにいる」のである。その地域資源としての価値を見直すべく研究を続けている。

長浜市西浅井黒山石仏群

黒山石仏群の板碑（左）と敦賀の板碑（右）

黒山石仏群の鎌倉時代石造物

石造物調査風景
（和歌山県高野山）